

オンラインで伝わるもの、伝わらないもの

本田 一穂*

新型コロナウイルスのパンデミックで大学教育もオンライン化が急速に進んだ。多くの教員はこれまでの対面の講義スライドに音声吹き込み、オンデマンド型のオンライン学習教材をアップロードした。さらに、Web 会議システムを使ってリアルタイムでオンライン講義を行った。この手の知識に疎い年配の教員は今も苦勞を強いられている。しかし、コロナの禍（わざわい）が転じて、教育の形態に大きな転換がもたらされたことは予期せぬ成果であった。

オンデマンド型の教材は、都合の良い時間と場所で、自分のペースで繰り返し学習できるので、学生には概ね好評で教育的効果も上がった。しかし一方では、自主的に勉強ができない学生が落ちこぼれ、成績の二極化現象が顕在化した。それはともかく、対面講義よりオンライン講義のほうが教育効果は高いのであれば、今後、対面講義は不要なのであろうか？ いや、対面講義でしか伝わらない何かがあるはずである。それは、知識だけではない、熱意（パッション）とか感動（エモーション）といったものなのか？

ヒトの感覚（五感）は解剖生理学的に、視覚、聴覚、嗅覚、味覚、皮膚感覚に分類される。皮膚感覚はさらに触覚、圧覚、痛覚、温度覚、振動覚に分けられる。視覚と聴覚は進化した高等動物で発達し、大脳新皮質の高次脳機能の認識に関わっている。それに対し、嗅覚や味覚は大脳辺縁系に関係する原始的な感覚に属する。さらに皮膚感覚は、脳の発達以前に体節（ミミズの節に相当）の段階で形成され

* 昭和大学医学部解剖学講座顕微解剖学部門

る最も根源的な生物の感覚といえる。このうち、オンラインで伝わるものは視覚と聴覚の二つでしかない。

視覚と聴覚は人間の感覚のなかで大きな割合を占め、その二つで表現する映画などは確かに人に感動を与える。ただ、そのときの感動は、見た人がかつて実体験した記憶を呼び覚ます仮想体験の感動である。本当の感動を体験するには、視覚と聴覚だけではなく、味覚、嗅覚、皮膚感覚を含む、周囲の情報を全身で受け取る感覚が必要なのではなかろうか。コロナ禍でコンサートや演劇、展覧会が中止となり、多くの実体験が制限されたことは、生物の根源的な感覚の受容、つまり皮膚感覚を制限していたのかもしれない。知識はオンラインでも伝わる。それ以外の何かを学生の皮膚感覚に伝えなければならない。コロナが終息して、教室に再び熱気が戻る日が楽しみである。